

資 料

ベルグソン哲學の

性格について

——拙著「ベルグソン」について恒藤

助教授に答う——

今 井 仙 一

「同志社法學」第二號に恒藤助教授が拙著「ベルグソン」の懇切な紹介を試みられたことは著者の感謝おく能わざるところである。ところで助教授は、それと関連して、著者自身の見解について「若干の疑問」を提出しておられる。明敏な助教授に對してこうした疑問を抱かせたことは、たしかに著者の思索および表現の未だ至らざるにもとづくものであつて、その點はみずから省みて深く恥じたいとおもう。しかし一面において、助教授の疑問の中には、助教授と著者との見解の相違に起因するものも二三あるようである。それゆゑここにその疑問に答えて著者の眞意を明瞭ならしめることは、著者にとつての喜ばしき義務であるとともに、またベルグソン哲學研究の一助ともなるのではないかとおもう。

拙著二十三頁において、わたしはつぎのように語つた、

「ベルグソンによれば、すべて内的にして單純なものとはつねに動的なもの、旋風の的なものであつた。そしてかかる動的・旋風のなもののみが、彼にとつて、眞に實在的と言われうべきものであつた。その限りに於いて我々は、しばしば引用して語られるかのヘーゲルの命題を模して、ベルグソンの世界觀の基本原理を、『すべて實在的なものは動的であり、そしてすべて動的なものは實在的である』と規定することもできらるであらう。これに對して助教授は言われる、「問題はまず、ベルグソンの世界觀を表現するのにヘーゲルの命題を模することが適當であるか否かと云う點にある。がこの點については、筆者はベルグソンとヘーゲルとは氣質的には殆ど共通性がないと考へてゐることを述べるに止める」と。すなわち助教授は、あたかも著者が、そのようにヘーゲルの命題を模することに於いて、ヘーゲルとベルグソンのあいだに思想内容の親近性の存することを暗示しようとしたかに解されたようである。しかし素直に著者の文章を読まれた人々の看取されるであらうように、著者はヘーゲルの命題の表現形式を模したのであつて、その思想内容を模したのではない。その形式は、より一般的には、「すべて甲なるものは乙であり、すべて乙なるものは甲である」と表現しうるものであつて、いわば形式論理學の初歩にぞくし、必ずしもとくにヘーゲルの哲學思想と密接な關連をもつものではない。したがつて我々はこの形式を採用し、甲と乙とに適當な言葉を代置することに

よつて、ベルグソンの思想にかぎらず、たとえば唯物論の思想、實證主義の思想、その他いかなる反ヘーゲルの思想的な思想をも表現することができるはずである。ただそうした一般的な論理的乃至言語的形式をとくに印象的ならしめ、かくてそれを普及せしめるに與つて力のあつたのはたしかにヘーゲルのかの命題であつたのであり、そうした事情がたまたま著者をしてあの場合ヘーゲルの名を想起せしめたわけである。ベルグソンとヘーゲルとが氣質的にほとんど共通性のないことは著者にとつても自明であり、その點においては著者の見解は助教授のそれと一致する。しかしさらに深く考えるならば、たとえばリッケルトが若きヘーゲルのうちに「生の哲學者」を見出だし、またワイリアム・ジェームズが、「ヘーゲルを何よりもまず一人の推論家として取り扱うことは彼に對して大きい不正を加えることを意味する。事實においてヘーゲルは一人の素朴な觀察者であつた。ただ専門的なそして論理的な論語に對する變態的な偏好が彼に災いしたばかりである。彼は事物の經驗的な流動のものなかに身をおき、そしてそこに生ずるものの生き生きした印象を受取る。彼の心は疑うべくもなく印象主義的である」と語つたように、ヘーゲルの中にも案外ベルグソンに近似したものの潜めることも看過されてはならないであらう。

ついで助教授はつきのごとく語られる、「ヘーゲルがすべて實在的なものは理性的であり、『理性的なものは實在的で

ある』と述べたとき、彼は明かに、理性的なもの、しからざるもの、本質と假象とを區別對立させ、兩者の間に價値の差別をつけていたのであつて、ベルグソンの場合と異なる。ベルグソンにあつては物質が必ずしも非實在的なものでないことは教授の指摘されているところであり、要するに實在という概念はベルグソンの哲學にあつて、ヘーゲルにおける程重要な意味を持つていないと考へられる。この點について著者はただちに助教授の説に同意しえないことを遺憾とする。助教授がヘーゲルについて語られたところは十分に正しい。(ただし、わたしの語感から言つて、ヘーゲルの *Wirklich* は「實在的」とよりもむしろ「現實的」と譯さるべきものと思われる)。しかしベルグソンにおいても眞の實在(すなわち動的なもの)としからざるもの(すなわち固定的なもの)とは十分に區別對立させられ、兩者の間に價値の差別はつけられていたのであつて、その點に關するかぎり、彼とヘーゲルとの間に決して差別は存しない。かえつてベルグソンの生涯の哲學的努力は、實在的なものゝを實在的と誤解した從來の主知主義的傾向に抗して、どこまでも實在的なものを直接に、直觀的に捉えようとしたところに存したのであつて、その點かれの哲學は終始一貫してただ「實在の把握」にのみ向けられていたと言われてよい。彼によれば科學も形而上學もともに實在の探究にはかならなかつたのである。「實在という概念」は、たしかに助教授の言われるように、ベルグソン

たどつて重要でなかつたかも知れない。しかし「實在そのもの」は、ベルグソンの哲學にあつて、ヘーゲルにおけると同じだけ、いな、それ以上に重要な意味をもつていたとも考えられる。その一つの證として、わたしはつぎの言葉を引用しておきたい。同じ「Être」とか「Absolu」とか言われるものはすなわちベルグソンにおける「實在」を示すものであるであらう。(Mais il faut s'habituer à penser l'Être directement, sans faire un détour, sans s'adresser d'abord au fantôme de néant qui s'interpose entre lui et nous. Il faut tâcher ici de voir pour voir, et non plus de voir pour agir. Alors l'Absolu se révèle très près de nous et, dans une certaine mesure, en nous.) L'Évolution créatrice, p. 323. なお純粹持續がしばしば「實在的持續」durée réelle と呼ばれたことも想起されていいであらう。

第三に助教授は言われる、「ベルグソンが重視したのは、動的・旋風のものの核心に存する純粹持續であり、エレンであつて、動的・旋風のものはその外面にすぎぬ」と。しかし著者はそうは考えない。純粹持續あるいはエレンそのものが、その核心において動的なのであつて、動的なものは決してその外面にすぎないのではない。助教授のよう解することはむしろベルグソン哲學の眞意を逸することであるであらう。ベルグソンにあつては動的即實在的即純粹持續的即エレン・ヴィタル的であつたのである。「いかにして人間精神

をしてその習慣的操作の方向を逆轉せしめ、實在そのものとして眺められた變化および運動から出發し partir du changement et du mouvement, envisagés comme la réalité même、そしてもろもろの靜止あるいは状態のうちには、もはや、動くものの上に取られたスナップ・ショット以外の何ものをも見ないような風に導くべきであらうか。」La pensée et le mouvant, p. 87. また、「運動は實在そのものである。Le mouvement est la réalité même、そして我々が不動性と呼ぶものは、ちよつと二つの列車が同一の速度で、同一の方向に、平行した二つの線路の上を進行するときを生ずるのと相似した事態にはかならなう」Ibid. p. 181. — じつした言葉はベルグソンの著書の隨處に見られるものであるが、それは、いかに彼が動的なるものをただちに「實在そのもの」として重視したかを示すに足るであらう。なお彼の「形而上學入門」をもよく重要な論文および講演集が「思想と動くもの」という標題を有することもこの際想起されていいであらう。

最後に助教授は、著者がベルグソンの哲學は實存哲學のなかに位置せしめていいのではないかと提議した個所を引用され、そしてこれに對して疑問を感じていられる。それは歸するところ助教授および著者のベルグソン解釋ならびに實存哲學の理解の相違にもとづくものであつて、やむを得ない仕儀と言わなければならぬ。しかし著者の眞意を言へば、もと

もとベルグソンの哲學を生の哲學と解するか、また實存哲學と解するか、といった問題はじつは末梢的な問題にすぎない。すべてすぐれた哲學者の思想は、實在とおなじく無限に豊かなものであつて、これを特定のイズムに分類し、それに一定のレッテルを貼付するといったことはたんに便宜上の手續きたるにとどまるであらう。それゆえわたしは、拙著の本文においては一言もそうした問題に言及していない。わたしはただひたすらにベルグソンの哲學をその生々躍動の相において、いわば直觀的に、捉えることをのみ庶幾しているのである。ただ、たまたま、外的・表面的自己から内的・根柢的自己への深化沈潜に關するベルグソンの思想を敘述しつつ、ゆくりなくもハイデッガーの思想との親近性を感じたので、きわめて簡単な註において、それも度ましい提議の形で、「ベルグソンの哲學は一般に『生の哲學』と言われている。しかし彼の哲學はより適切にはむしろ『實存哲學』のなかに位置せしめらるべきではないであらうか」と語つたのである。そして後さらにいま一つの註を附し、そこでも「社會的自己を單に表面的となし、眞に實在的な自己をふかく内的な個體的自己のうちに見出だそうとしたかぎり、ベルグソンの哲學はあくまで實存主義的であつたと言われていいであらう。しかしもし實存哲學を狹義に解し、孤獨、絶望、憂愁、不安、虚無、といった契機がその特色をなすものと考えられるならば、自己の深層にエラン・ヴィタルという一つの『安定點』

を見出だしたベルグソンはもはや實存哲學者とは言われぬであらう」と語つておいたのである。しかるに助教は、「もつともこの點については實存主義を狹義に解すればベルグソンは實存哲學者とは言えないと後に述べられているが、いづれにしても實存主義的であるとされていることには變りはない」（傍點今井）と言われる。しかし右に引用した著者の言葉を虚心に讀まれるならば、著者がベルグソンを實存主義的であると斷定しているのではなく、たんに一つの提言として謙虚に申し出ているにすぎないことは、いかなる讀者にも明瞭であらうと思う。もつとも助教がこの提言に反對されることはどこまでも助教の自由である。しかし最近一人のすぐれたフランス哲學研究者が、著者の最初の註の全文を引用され、そして「この提言にも十分顧みらるべき理由があるといふべきであらう」（淡野安太郎氏著「フランス哲學入門」、一六一頁）と附言されているところから見ても、著者の提言が必ずしも見當はずれのものでないことは明かであるであらう。

さて、著者の提言に對する助教の異論は二つの根據からなされている。一つは「ベルグソンは個人を孤立した個人として扱えていない」、「個人は超絶的存在としては考えられてはいない」といふ點であり、いま一つは「思想の系譜」といふ點である。第一の點について言えば、實存主義といふのは何にもまして客觀性よりもむしろ主體性を重んずるものであ

り、日常性よりもむしろ非日常性を重んずるものであり、社交的平均性よりもむしろ例外的個性を重んずるものであること、そしてベルグソンが、「人がそれによつて彼自身の底まで掘り下げてゆく努力」は「よし可能なりとするも例外的である」と語り、そしてかかる例外的努力によつて閉じた社會をその底へと超越し、社會化された自己の底に眞の個體的自己を、他の個性と不可通約的な一つの個性を見出だす底の個人を「選ばれた魂」と名づけたとき、こうした魂——それはまた「偉大な神祕家」とも呼ばれる——は多分に實存主義的な性格を有するものであつたことを指摘しておきたい。しかしそれにも拘らず、實存主義を狹義に解すればベルグソンは實存主義的と言わねえなことは著者の註したところであり、その際にも一言しておいたように、「要は實存哲學をいかように解するかにある」のである。ひとしく實存哲學といつても、神の前に立つキェルケゴールの實存もあれば、神に關わりなきハイデッガーの實存もあり、また明らさまに神を否定するサルトルの實存もあり、その内容、そのニュアンスはきわめて多種多様である。すなわち實存主義というのは多岐性を藏した一つの傾向を名づける言葉であつて、一つの特定の立場、特定の體系を指す言葉ではないのである。わたしは助教授が實存主義のもとにいかなる思想を解されるかを詳しくは知らないが、わたしの解するかぎりでは、ベルグソンの哲學は明かに實存主義的傾向に添うものと言われてよい。

のみならず「生の哲學」と「實存哲學」とが果してハッキリと峻別できるか否かも疑問である。たとえばリツケルトがハイデッガーの哲學をも「生の哲學」として捉え、また大道安次郎氏がヤスベルス、ハイデッガー等によつて代表される實存の哲學およびシェーラーなどの哲學的人間學をも「生の哲學」の第三期に編入されている（三木清編「現代哲學辭典」）ところからも明かなように、生の哲學と實存の哲學とはもとと極めて親近的なものと言われなければならない。

第二に「思想の系譜」という點であるが、その下に助教授はいかなるものを考えていられるのであろうか。メーヌ・ド・ピランからベルグソンにいたるフランス哲學の流れは實存主義と疎遠であると言われるのであろうか。あるいはひろくフランス哲學そのものは實存主義的でないと言われるのであろうか。しかしサルトルが（*L'existentialisme est un humanisme*）においても言及しているように、實存主義にとつて第一に確實なことは、デカルトの *Cogito, ergo sum* において典型的に認められるごとき意味の自我、要するに實存が實存することであり、この點から見れば、近代實存主義の祖はデカルトであるとも言えるのである。フランス的思想の系譜は決して實存主義と疎遠なものではない。パスカル、メーヌ・ド・ピラン、アミエル、ラシユリエ、——こうした人々において多分に實存主義的な性格を連想するのは、必ずしも著者一人ではないであらう。

以上わたしは助教授の疑問に答えてわたし自身の見解を明かにしようとした。わたしは助教授が拙著「ベルグソン」を紹介批評されることによつて、その不備にして誤解のおそれある點を明かにされ、あわせてわたしに對してこうした辯明の機縁を與えられたことに深い謝意を表したい。哲學はもはや私的な個人的な仕事でなく、どこまでも公共的・社會的な協同作業でなければならず、そのかぎりわたしは、拙著の紹介を機縁として、助教授とともにこうしてベルグソンを問題として討議する機會をもちえたことを何にもまして大きい喜びとするともに、さらに助教授が今後ともつねに眞摯な討論の機會を捉えられ、協同的な學問の仕事にますます精進されんことを心から希望したい。(一九四九・一一・一五)

資本制崩壊過程に於ける

金融資本の法的性格(二)

——ロシヤ《亡命會社》の法人性——

岡本善八

はしがき

一 ロシヤ《亡命會社》發生の社會的基礎

(一) 問題の基點

資料

- (二) 外國資本浸透の契機
- (三) フランス金融資本の様相
- (四) ドイツ・イギリス金融資本の様相
(以上前號所收)

二 ロシヤ《亡命會社》の法人性

- (五) 國有化法の概観
- (六) 《亡命會社》の發生
- (七) 法人性考察の基點
- (八) フランスに於ける準據法
- (九) 各國に於ける準據法
(以上本稿所收)

五

右に述べた如き所謂「最も残忍な最も野蠻的な形態を採つた、資本主義的・植民地的・軍事的といつたあらゆる種類の壓迫の根源であり」、『全ての帝國主義的矛盾の結節であつた』帝政ロシヤわ一九一七年十一月七日の十月革命によつて、この中世的國家の持つ二つの支柱^{註25}——專制君主制度と農奴制度——の崩壊を決定付けた。

このソヴェトロシヤが解決すべき當面の問題わ、第一に對外講和の問題であり、第二に社會主義經濟の建設であつた。前者に就てわ、一九一七年十二月五日のプレスト・リトウスク Brest-Litovsk 休戰條約に基づく一九一八年三月三日の講和締結により一應の解決を見たのであるが、より重大なる